

ダブルバルーン小腸内視鏡アトラス

山本博徳, 砂田圭二郎, 矢野智則 編

＜書評者＞ 松井敏幸（福岡大学教授・筑紫病院消化器科）

小腸内視鏡は、現在学会や研究会で研究対象として隆盛を極めていいる。また、日本に限らず世界でも臨床応用が急速に進んでいる。その礎をつくられた山本博徳先生の本ができた。過去を振り返ると、カプセル内視鏡（VCE）の臨床応用が始まって間もなくダブルバルーン内視鏡（DBE）が作製された。当時のわれわれの心境は、「そんなの信じられない」であった。間もなく、DBE が実際に現れ、山本先生が指導にいられた。多くの驚きと期待で DBE の使用が始まった。壮大なマジックを見るような思いであった。それまで小生の施設では、小腸疾患の多くは X 線検査で診断され、プッシュ式内視鏡や術中内視鏡で確認する作業が行われてきた。それで不自由はないと思ってきた。現在も小腸疾患の初回診断は X 線検査が行われ、それは有用性を失ってはいない。ただし、そのような世界は九州のわれわれの関連施設に限られるようである。

DBE の挿入技術は著しく進歩している。それに伴い DBE の診断能も日進月歩である。本書では、

まず手技に関する総論に相当のページが割かれている。その内容は、DBE の仕組み（なぜ小腸全域を観察できるのか）、DBE 検査を行うに当たって（知っておくべき基本事項）、挿入手技（効率のよい挿入に、基本原理はここでも活きる）、偶発症と防止策（特有の偶発症を理解することで、事前に防止できる）、治療手技（内視鏡治療の実際）である。DBE が普及し多くの診療に使用されているが、基本に立ち戻って確実に安全な操作をしてほしいとの希望が込められている。DBE の安全性に関する治験が行われ、保険申請前でもあり、重要な願いであろう。海外にも極めて多くの DBE 使用者がおり、すでにアトラスが出版されている。本書は、それに負けない内容になっていると思われる。

各論では、多くの疾患がわかりやすく解説されている。序に書かれている通り、その症例はほぼ自治医大の経験例に限られ、その数は 42 例にも及び、重要な疾患が網羅され、しかも厳選されている。実際の臨床に即して X 線検査や DBE 所見、さらには病理所見もわ

かりやすく提示されている。

後半には、治療の実際にも触れられる最新の内容が盛り込まれている。症例提示は、悪性腫瘍、良性腫瘍、ポリポース、炎症性腸疾患、出血性病変、特殊な疾患の順と思われる。特に出血性病変は矢野・山本分類に沿って提示され、治療法もその分類に従って異なることが理解される。ただし、症例提示が、系統的な順番でない。症例の目次がなく、症例の現れる順番のオリエンテーションがつきにくい。最小限の文献提示があるところによかった。

今後、各施設で多くの DBE 症例が経験され、さて最終診断は何であろうか、治療はどうすべきであろうか迷うことも多くなるはずである。そうしたとき、本書が有用であろう。また、基本操作に迷うとき、あるいは治療において補助具を使用する際に本書を参考にされるとよい。また、NSAIDs 小腸炎をはじめ、Crohn 病などの小腸の炎症性疾患の病態解明や治療評価に必須の操作になりつつある。DBE を通して学問の進歩に大きな貢献が期待される。

●B5 頁 144 2009 年
定価 9,450 円
(本体 9,000 円＋税 5%)
[ISBN978-4-260-00714-6]
医学書院 刊